

蘇芳集

水辺の旅

高橋 さえ子

帆柱の凜々と湘南線の夏

江の電の海風涼し夕かもめ

蟻を見て働き詰めの日々恋し

街灯の点滅 更けて青嵐

起き抜けの眠気覚しの新茶かな

新茶汲む萌黄のいろのひとしづく

癒え近し水辺の旅の夏料理



眉山

青山 丈

生き生きと眉山が夏の山となる

山坂の途中の阿波の植田かな

誰よりも阿波の乙女の日焼かな

片蔭を深く出を待つ三番叟(拝宮農村舞台)

一枚の簾の裏の黒子かな

万緑の中の何処かが暮れてをり

瀧一つまぼろしにして帰りけり

滝

長沼 三津夫

滝水の霊水としてかかるなり
炎天の船影として微動だも
霊山の己れにのみの滝はげし
霊山の滝の音なくかかるなり
船影の昼のままなる月明り
短夜の更けゆく沖の遠汽笛
わが影のふと他人めく十三夜

紫陽花

上林 孝子

帰り来し家内寂と梅雨兆す
紫陽花をはみ出してゐる鬼ごっこ
春落葉踏んで晩年何もなし
夏帽を被りて少し若やぎぬ
水無月の川白々と暮れ残る
短夜や数へきれざる羊の数
をとつひの夕刊を読み夏の風邪

待ち合せ

小島みつ如

待ち合せ駅の子燕嘴鳴らす
句碑訪はむ森林浴も子燕と
海風に杜の応ふる涼しさよ
踏石の十葉明りかもめ句碑
緑さす句碑のつややか常しなへ
そよ風や黄の睡蓮の笑むごとし
釣果なき父子の帰る夏霞

心 太

金田 きみ子

登校の列長々と梅雨走る
指染めて孫子の単衣縫ひ上げる
祭見に皆出てひとり遠囃子
寄り来れば猫と戯れ夕薄暑
靈魂の話また出て涼み台
心太友情の身に染みわたる
夏掛に心のくもり包みけり

青岬 真保喜代子

岬へのバスの間遠や麦の秋
初夏の松籟を聞き句碑の辺に
句碑あればこそその親しみ青岬
しらしらと夏来たりけり石切場
あぢさゐや昭和の残る港町
海見むとあぢさゐの坂振り返る
漁師いま家居の時間青簾

沙羅の花 中村智恵子

一山の薨の反りや万緑裡
大橋を渡れば菖蒲まつりかな
水無月の歩みおのづと水辺りへ
あめんぼのびつしり雲に被されり
梅漬けてしばらく手持ちぶさたかな
何も書かず書けず新樹の夜の手紙
一生に区切り幾たび沙羅の花

